

# 地水火風

牧野 恒一

私の自宅の近所で連続放火事件が発生した。近年、放火火災が急減しており、昔よくあった連続放火事件の話も久しく聞かなくなっていたので驚いた。私に身近な話題で恐縮だが、本稿では、放火火災の傾向と対策、連続放火の特徴とその対策などについて考えてみたい。

## 浦安の連続放火事件

千葉県浦安市の団地の駐輪場で自転車やバイクが放火される事件が5件相次いで発生し、6月3日現在、犯人は捕まっていない。これまでにバイクと自転車計38台以上が焼損したが、死傷者はなく、住宅自体も燃えていない。

最初の火災は連休中の5月3日深夜、住都公園の団地の駐輪場でバイクと自転車17台が燃えたもので、現場からはオイル

## 最近の放火火災の傾向

消防白書によると、21年中の火災352222件中、「放火（放火の疑いを含む）」は38888件（11.0%）で、2位の「たばこ（3042件）」を引き離し、出火原因のトップである。

この関係は、76年以降

# 近所で連続放火事件が発生した

火災が減っている」（本紙10年3月10日号）で詳しく分析したが、その後も放火火災の減少傾向は続いて現在に至っている。

放火は社会・経済の歪みなどを反映した犯罪だ。近年、日本の社会・経済の状況は停滞を続け、格差も激化してきて、放火が増え続けてもおかしくない状況なのに、何故減少に転じたのだろうか？

などということが浮かび上がる。

このような分析から、「放火するまでに一手間かけさせる工夫」と「人目を気にさせる環境作り」が重要だとすることも分かってくる。

具体的には、夜間に家の周囲を明るく保つとか、建物の周り（特に死角になるところ）に燃えやすいものを放置しないとかいうことが、放火対策の基本だということだ。

「放火するまでに一手間かけさせる工夫」と「人目を気にさせる環境作り」を社会運動として定着させることが必要だということだ。

だが、これが難しい。分かっていても徹底できない、ということが放火対策の難しいところだ。

その結果、地域共同体が崩壊し、都市化によって匿名性が増し、社会の歪みが強まるのと比例して、放火件数が増加し続けることになった、というのが76年から02年までの状況だったのだ。

なるほど、これなら放火犯が「もう1軒火をつけてやろう」と思っている、今日はやめておこう」となりそう。

また、「放火監視カメラ」が試作され連続放火未解決地域に設置する社会実験も行われた。これは、炎センサーとカメラを組み合わせたもので、ダミーのカメラと合わせて放火されやすい場所に設置するものだ。防犯用の監視カメラはプライバシー

「連続放火防止対策」連続放火が増えて、一時、放火火災の20〜30%を占めるようになったとき、消防庁で連続放火対策が検討された。犯罪プロファイリングの手法なども応用した「放火火災防止対策戦略プラン」（04年）がそれである。

この状況を一変させたのが、今世紀になって顕著になった監視カメラの普及だ。監視カメラの普及と曲線との類似は驚くほどだ。監視カメラの普及によって放火犯が捕まったというより、「監視カメラが見張っているかも知れないので、放火する気になれない」という抑止力が大きいのではないだろうか。前述の放火対策で言えば、「人目を気にさせ

この状況を一変させたのが、今世紀になって顕著になった監視カメラの普及だ。監視カメラの普及と曲線との類似は驚くほどだ。監視カメラの普及によって放火犯が捕まったというより、「監視カメラが見張っているかも知れないので、放火する気になれない」という抑止力が大きいのではないだろうか。前述の放火対策で言えば、「人目を気にさせ

ることが多いのは、様々なところに監視カメラがあり、車載カメラなども動員すると、犯人を特定しやすいだろう。だが、監視カメラのあまりない住都公園の古い団地のような場合は、中で妙な動きをしても、なかなか特定できない。今回の事件で、犯人が監視カメラの有無を意識して犯行に及んだかどうかかわからないが、結果的に、古い大規模団地という監視カメラの配置密度が低い（と

それは、古い住都公園の団地、という特殊性があるためではないか、というのが私の推測である。古い住都公園の団地は数ヘクタール以上の広さに千戸以上の住戸が入っている大規模なものも少なくない。最近のマンションは、1棟建てのものも団地形式のものも、入退出管理などセキュリティチェックが厳しいが、古い団地は近隣住民の散歩コースになっているなど、開放的である。管理組合で、セキュリティ強化のために監視カメラを設置したらどうか、などの提案がなされることもあるが、プライバシーの侵害を嫌って、否決されることも多い。今回の団地がどうだったかはわからないが、最近、街中で犯罪があっても犯人がすぐに捕ま

ることが多いのは、様々なところに監視カメラがあり、車載カメラなども動員すると、犯人を特定しやすいだろう。だが、監視カメラのあまりない住都公園の古い団地のような場合は、中で妙な動きをしても、なかなか特定できない。今回の事件で、犯人が監視カメラの有無を意識して犯行に及んだかどうかかわからないが、結果的に、古い大規模団地という監視カメラの配置密度が低い（と

それは、古い住都公園の団地、という特殊性があるためではないか、というのが私の推測である。古い住都公園の団地は数ヘクタール以上の広さに千戸以上の住戸が入っている大規模なものも少なくない。最近のマンションは、1棟建てのものも団地形式のものも、入退出管理などセキュリティチェックが厳しいが、古い団地は近隣住民の散歩コースになっているなど、開放的である。管理組合で、セキュリティ強化のために監視カメラを設置したらどうか、などの提案がなされることもあるが、プライバシーの侵害を嫌って、否決されることも多い。今回の団地がどうだったかはわからないが、最近、街中で犯罪があっても犯人がすぐに捕ま

## 放火火災の防止対策

50年以上続いているが、放火火災の傾向を見ると、実は大きな変化が起きている。76年以降02年まで、放火火災件数は一貫して増加傾向を続け、02年の放火火災件数は14553件で全火災の23%（大都市部では40%以上）を占めていた。

だが、03年以降は一転して減少に転じ、20年間でなんと4分の1に急減した。この激変の状況については、以前拙稿「放

放火火災の防止対策 火災統計を分析すると、

- ・外部から人目につかない場所に接近しやすい建物ほど放火されやすい
- ・外部から接近しやすいところに放火される
- ・手近な布、紙屑、枯草などに放火される
- ・道路上のものに火をつけるより、建物敷地内に入り込んで火をつける方が多い

だが、それだけでは、我が家が放火される確率を減らすことはできても、国全体として放火件数を減らすことはできない。むしろくしゃして放火したがついてくる犯人は、結局近隣の無防備なエリアに放火してしまうかも知れず、そうなれば放火件数は同じだからだ。

放火件数を減らすためには、「手間」と「人目」を基本とした「放火させ

この状況を一変させたのが、今世紀になって顕著になった監視カメラの普及だ。監視カメラの普及と曲線との類似は驚くほどだ。監視カメラの普及によって放火犯が捕まったというより、「監視カメラが見張っているかも知れないので、放火する気になれない」という抑止力が大きいのではないだろうか。前述の放火対策で言えば、「人目を気にさせ

連続放火対策と言っても、以前は、街灯を増やすとか、空き地の雑木の刈り込みをするとか、自治会でパトロールするなど古典的な手段しかなかったが、同プランでは、それらに加えて、「消防車のサイレンの音が聞こえたら、一斉に灯りを点けて窓を開けよう」と自治会で申し合わせる、など新しいアイデアも打ち出された。

この状況を一変させたのが、今世紀になって顕著になった監視カメラの普及だ。監視カメラの普及によって放火犯が捕まったというより、「監視カメラが見張っているかも知れないので、放火する気になれない」という抑止力が大きいのではないだろうか。前述の放火対策で言えば、「人目を気にさせ

この状況を一変させたのが、今世紀になって顕著になった監視カメラの普及だ。監視カメラの普及によって放火犯が捕まったというより、「監視カメラが見張っているかも知れないので、放火する気になれない」という抑止力が大きいのではないだろうか。前述の放火対策で言えば、「人目を気にさせ

この状況を一変させたのが、今世紀になって顕著になった監視カメラの普及だ。監視カメラの普及によって放火犯が捕まったというより、「監視カメラが見張っているかも知れないので、放火する気になれない」という抑止力が大きいのではないだろうか。前述の放火対策で言えば、「人目を気にさせ